

国語科教員養成に関する一考察（三）

― 研究交流集会における模擬授業（松本美樹）の場合 ―

渡 辺 春 美

はじめに

二〇〇一年一月二七日に全国大学教職課程研究連絡協議会の主催によって、「教職課程運営に関する研究交流集会」が沖縄国際大学を会場に開催された。その一環として、沖縄国際大学総合文化学部の国文学科・英米文学科の教職課程を履修する学生による国語科・英語科の模擬授業を実施し、研究協議を行った。沖縄国際大学では、教職課程において授業実践力を高めるために模擬授業を重視している。その成果を問い、さらに教職課程を充実したものにすため、この機会をとらえ実施することにしたのであった。国語科は、国文学科三年次生の松本美樹さんが模擬授業を行った。

本稿では、この研究交流集会における模擬授業を紹介するとともに、模擬授業のビデオを視聴した学生の感想をも交えて考察を加えたい。

一 「研究交流集会」における模擬授業

先述の研究交流集会は、『琉球新報』・『沖縄タイムス』の二紙によって紹介された。その内、前者は、「模擬授業」を中心に、次のように取り上げていた。

教員養成課程を設置している私立大学関係者が協議・交流する「二〇〇〇年度教職課程運営に関する研究交流集会」（全国私立大学教職課程研究連絡協議会主催）が二十七日、宜野湾市の沖縄国際大学で開かれた。午前中は沖縄大で教職課程を履修する学生たちが国語と英語の模擬授業を行い、それを基に集まった教職員たちが意見交換した。

同大では実践的な教員養成をするために教育実習の事前指導として、学生による五十分の模擬授業を取り入れ、生徒役になる学生と指導教官が批評を行っている。この日は全国から集まった関係者を前に、その取り組みを講演。国語は松本美樹さん（国文学科三年次）、英語は浦崎愛さん（英文学科四年次）が教師役となり、それぞれ同年次の学生たちを相手にした模擬授業が行われた。

国語の授業は中学三年で扱う詩を取り上げた。あらかじめ生徒から集めた詩の感想を教師が一覧表にし、それを踏まえて授業の中で一人ひとりあらためて感想を述べさせる形で進められた。松本さんは授業の狙いを「教師が詩の意味を示すのではなく、生徒自らが考えを深めること」と述べた。

授業後は教職員たちが意見交換。「完成度の高い授業」と評価する声や改善点の指摘があった。また、近隣の高校生たちを生徒役にして模擬授業を実施したという大学教官は「同級生が生徒役になると批評も甘くなりがち。授業の相手を変えて実施してみても」と提案した。

同集会には全国の私立大から教職課程担当の教官や事務職員など七十人近くが参加。午後は講演会や「教職課程の現場と将来展望」と題したシンポジウムが行われた。 （二〇〇〇年一月二十九日付『琉球新報』朝刊）

記事にあるように、沖縄国際大学教職課程では、実践力育成のために、模擬授業を充実させている。この「研究交流集会」開催の時期は旧課程（注）であり、国語科教育法は、国語科教材研究（三年次前期 二単位）と国語科教育法演習（三年次後期 二単位）の計四単位であった。この内、三年次後期が模擬授業に当てられたが、これだけの時間では実践力を育成するには不十分であった。そこで、国語科教育法演習の受講者を二クラスに分け、どちらかのクラスに登録させた上で、二クラス合同の二時間（一八〇分）を全員に受講させることにし、実践・理論の短時間によ

る講義とともに模擬授業を行わせている。さらに夏（学年前期）、春（学年後期）の合宿を行い、教材研究、討議等とともに模擬授業を班別に実施させた。合宿では、集団生活、班学習をとおして、密度の高い学びの交流の中で国語力、指導力、授業実践力をつけることを目指した。

通常模擬授業は、模擬授業実施者と生徒役の学生によって行われる。司会を介して、①指導案の説明、②模擬授業の実施、③実施者による模擬授業の反省、④学生による批評、⑤担当教員による講評と進められる。学生はスーツ着用で授業に臨み、厳しく意見を交流し合い、鍛え合うことが力をつけることにつながることを認識している。したがって、新聞紙上の「同級生が生徒役になると批評も甘くなりがち」という批判は必ずしも実状に合ったものではない。また、同じく「近隣の高校生たちを生徒役」にすることも現状では難しい上に、学生四〇〇五〇人が五〇分の模擬授業を行う事を考えると、実施は難しいと言わざるをえない状況にある。

二 模擬授業の実施計画

松本美樹さんは、実施計画を立てるにあたり、「本教材が中学校一学年から高校二学年までに扱う『詩』の教材の中でどのような位置を占める教材であるかを確認する。」として、中学校一年から高等学校一年で扱う詩教材を取り上げ、その系統を辿っている。

例えば、中学校一年生の「野原はうたう」（工藤直子）では、「中学校入学後最初の国語の授業ということもあり、学習の内容は主に朗読や発表等『表現』に重点を置いた学習となる。」とし、中学校三年生の「お辞儀をする人」（安西均）では、「表現の特徴に注意し、言葉に込められた作品からのメッセージを読み取る。人間・社会・戦争・歴史等について考えを深め、感想をまとめ、発表する。」というように教材と学習事項を押さえている。

また、クラスの状況に関しては、「高校入試を目前に控え、寸暇を惜しみ受験勉強に励む生徒達。また、一足先に推薦入試で合格し、卒業文集の製作に取り掛かっている生徒達。そして、卒業後新たな社会へと旅立つ生徒達。皆、目指す方向は違うが各々が期待と不安を胸に抱えている。」と設定した上で計画を立てている。

松本美樹さんの立てた指導計画の内、単元名・教材、教材観、指導目標、略案について整理して掲げると、次の通りである。

(一) 単元名・教材

単元名 「七 未来に向かって」 (国語三 光村図書)

教材 「わたしを束ねないで」 (新川和江)

教材は、次の通りである。

わたしを束ねないで

新川和江

わたしを束ねないで

あらせいとうの花のように

白い葱のように

束ねないでください わたしは稲穂

秋 大地が胸を焦がす

見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを止めないで

標本箱の昆虫のように

高原からきた絵葉書のように

止めないでください わたしは羽撃き

こやみなく空のひろさをかいさぐっている

目には見えないつばさの音

わたしを注がないで

日常性に薄められた牛乳のように

ぬるい酒のように

注がないでください わたしは海

夜 とほうもなく満ちてくる

苦い潮(うしお) ふちのない水

わたしを名付けないで

娘という名 妻という名

重々しい母という名でしつらえた座に

座りきりにさせないでください わたしは風

りんごの木と

泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで

コンマピリオド
、や・いくつかの段落

そしておしまい「さよなら」があつたりする手紙のようには

こまめにけりをつけないでください わたしは終わりのない文章

川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく 一行の詩

(二) 教材観

教材観については、次のようにまとめられている。

・ 本教材『わたしを束ねないで』は、中学三学年の最終単元「七・ 未来に向かって」の後半部に取り扱うことになっている。この単元は、中学三年間で培ってきた全ての能力を発揮させ、更に充足させる機能を持ち、中学の国語学習の総まとめを図ることを目的としている。ここでは国語の学力はもとより、今までの学習の中で学んできた「**“人生” “社会” “自分” とは何か?**」という、人間にとって最重要とされるテーマについて各々に考えを深めてもらいたい。そこで、本教材では主題ともなる作者の人生観（世の中の矛盾に対する反発心、自由へ希求心、生への情熱・ 歓喜・ 希望）を読み取らせ、各自自分なりの考えを巡らし、今後の生き方について再度考えさせる。そして、ここで学んだものを卒業後に始まる、新しい生活への糧にしてもらいたいと考えている。

(三) 指導目標

指導目標は、次のように立てられていた。

〈読む力〉

・ 今までの学習の中で培ってきた読解力、発想力及び表現技法等の知識を基に、自身の力で主題を捉えさせる。

〈聞く力〉

・ 全員発表の授業を通し、様々な意見を丁寧に聞く力を育てる。

〈話す力〉

・ 全員発表の授業を通し、様々な意見の対立がある中でも、自己の意見を的確に表現する力を育てる。

・ 創作詩の発表により、自分の思いを他者に訴えかける表現法を学ばせる。

〈考える力〉

・ 表面的な言葉の奥にある作者の人生観を捉えさせ、それを基に各自自身を見つめさせることで、今後（卒

業後)の生き方を展望させる。

・作品を通して「自由」「個性」「可能性」「社会」「人生」等についての考えを深めさせる。

(四) 指導計画

指導計画は、「指導内容」「学習活動」「指導上の注意」に分けて、指導略案として提出されていた。それを、簡略にまとめると、次のようになる。

〔1時〕教材への関心を持たせるとともに、作品に対して感想を持たせる。そのために、学習目標の確認、黙読、音読、詩の学習についての話し合い等を行わせ、学習プリントを利用して、題名読み、意味調べ、気に入った連を選び、その理由を考えさせ、発表させるなどの学習活動を行わせた後、初発の感想を書かせ提出させる。

〔2時〕前時の復習、本字の予告、範読の後、前時に書かせた初発の感想を分類しまとめた表を配布する。感想一覧表に基づいて、作品の表現を押さえながら感想を発表させ、「わたし」が拒んでいるもの、望んでいるものを確認する。

〔3時〕前時の復習の後、感想一覧表に基づいて生徒の発表を中心に授業を進め、作品のメッセージを捉えていく。次時までの課題として詩を創作してくる。

〔4時〕前時の復習。プリントの説明に基づき、六班に分かれ、班ごとに前に出て創作詩の発表会を行う。発表会を通して級友の「生きることについての思い」に触れさせ、再度感想を書かせる。学習をまとめ、次時の予告を行う。

(五) 本時(模擬授業)の指導計画

「研究交流集会」における模擬授業の指導計画は、次の通りである。

指導内容	学習活動	指導上の注意
・初めの挨拶		・級長に元氣よく号令をかけてもらう。

展開 40 分	導入 5 分
<ul style="list-style-type: none"> ・ 範読 ・ プリントに沿って段階的に理解を深めていく。 ・ 「何故そう感じたのですか」 ・ 「どの表現からそう感じたのですか」等。 ・ 感想①～⑭まで。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出席確認 ・ 持ち物確認 ・ 前時の復習 ・ 本時の内容を予告 (授業展開の説明) ・ 学習目標の掲示
<ul style="list-style-type: none"> ・ 範読を聞き、内容を再確認する。 ・ 全員の初発の感想を順序よく確認する。 ・ 「広大な自然が詩の中に出ているから」 ・ 「『・・・しないで』と言いつりの表現から」等。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時に使用した学習プリントを見ながら行う。 ・ 全員の初発の感想を理解度順に並べ記したプリントを確認。 ・ 『作品からのメッセージを受け止め考えを深める』（学習プリントに記入）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師側の読みを強調しないよう注意して範読。 ・ 決して誘導的にならぬよう発問には注意。 ・ 二時間目では、「わたし」の拒んでいるもの・望んでいるものを捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ きちんと一人一人の顔色をチェックする。 ・ 忘れ物がないかを確認し、忘れ物をしないように促す。 ・ 返却は各班の班長に頼む。指示は素早く的確に行う。

終結 5分	
<ul style="list-style-type: none"> ・学習のまとめ。 ・次時の予告。 ・終わりの挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の範囲の学習内容を確認する。 ・感想⑮～⑱を見ていく。
<ul style="list-style-type: none"> ・次時では作品の持つメッセージを捉えていく。 ・副級長が号令をかける。 	

「教材観」には、本教材「わたしを束ねないで」に対するやや過剰な期待が見いだされるが、教材をとおして理解、認識を深めるべきことと、国語学力の育成とを視野に入れてまとめていく。後者については、四つの国語学力ごとに設定された「指導目標」に反映されている。この「指導目標」は、「読む力」・「聞く力」・「話す力」に加えて、「考える力」を入れているところに特色が見いだされる。「指導目標」には、本教材について理解、認識させるべき価値目標を別途設定してより具体的に記すべきであったであろう。それは、本計画案では主に「考える力」に入れている。

「指導計画」によれば、詩の鑑賞指導から創作指導への展開が具体的に計画されている。しかし、この計画は、取り分け、詩の創作（課題）と発表（四時間目）の計画に問題がある。詩の創作に関する指導がなされないままに詩作が課題とされ、また、次時（四時間目）にすぐさま発表となっている。一時間で一クラス六班全員に発表させる点、感想を書かせ、学習のまとめをすることになっている点にも疑問が残る。

「本時の指導計画」の中心的方法は、浮橋康彦氏になる「全員発言の授業」である。この方法を採用に至った授業のねらいを、松本美樹さんは、次のように述べている。

今回の模擬授業では、生徒が主体的に授業に臨み、その中で生徒各自が自分なりの『課題』を持ち、それに就いて考え、悩み、発言し、聴き合うという授業スタイルを目指し指導計画の作成にあたった。その上で、浮橋康彦氏が提唱しておられる「全員発言の授業」を大変参考にさせて頂いた。

「全員発言の授業」は、「生徒を学習の主役にする方法」とされる。その方法は、「まず、初発の感想を要点によって分類し、感想の要点による分類一覧表を作成する。一覧表は最初の要点グループから生徒が順に感想を述べるにつれて、感想の類似や深化や対立などが自然に明らかになり、読みが深められるように作成されている。一覧表には感想の要点グループ毎に生徒の氏名も記されている。それを全員に配布し、一つの要点グループ毎に発表起立させる。生徒は手元の表とノートを見ながら次々と口頭発表する。」と説明されている。その意義は、次のように記されている。

- ・ 学級の全員が一人残らず発言する。
- ・ 「表」とノートがあるから、何を言うべきか自信を持って発言できる。
- ・ グループ毎に一齐起立であるから、孤立的でなく、同じ考えの仲間がいるという安心感で、落ち着いて発言できる。
- ・ 同一グループの中には、優等生も遅進者もいる。それが共同的・連帯的に発言するのだから差等意識がなくなる。
- ・ 全員の発言を全員が丁寧に聞く経験をすることによって、話す・聞くの基本訓練が出来る。同一感想グループ毎、だから、予想が立って聞きやすい。
- ・ 他者の様々の考えを聞いて、自分の考えを相対化し、認識を広げることが出来る。
- ・ 学習者の発言によって、学級の中に自分をしっかり位置付けることが出来る。

浮橋康彦「読んで書き、全員が発言する『小説』の学習」

松本美樹さんは、「生徒が主体的に授業に臨み、その中で生徒各自が自分なりの『課題』を持ち、それについて考え、悩み、発言し、聴き合うという授業スタイルを目指し」という。そのために、「今回の模擬授業では、浮橋康彦氏のこの授業方法を私なりにアレンジし授業の中に取り入れ」としている。授業の中で、「全員発言の授業」方

法がどのように活かされるかが注目される。

三 模擬授業の実際

模擬授業の展開を映像記録に基づき「板書事項」と「授業展開」とに分けて記すと、次の通りであった。授業で配布した「感想一覧表」は、後に掲げている。

板書事項	授業展開
<p>わたしを束ねないで</p> <p>新川和江</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>標 作品からのメッセージを受け 目 止め自分の考えを深めよう！</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 比喻 ・ 対比 ・ 自然に関することが多く出ている。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 出席確認、持ち物確認。 2. 前時の復習。 3. 感想一覧表の説明。 4. 学習目標をプリントに記入させる。 5. 題名・詩人名板書。目標提示（短冊）。 6. 目標確認。感想発表により読みは自然に深まると説明。 7. 範読（机間を巡回しながら、しっかりと落ち着いた声で範読）。 8. 授業方法の説明。感想一覧表に基づき、感想の要点グループごとに起立して、授業者の質問に答えるよう指示。 9. 発表の準備（二分）。 10. 発表。

○「作品」・「わたし」について

感想 A

- ・ 自己中心的
- ・ 逃げ
- ・ 怒り
- ・ 孤独

感想 B

型にはめられたくないという反発心。
 「わたし」は「わたし」であるという自己主張。
 自由に生きたいという思い。
 可能性。
 作者のパワー。

一覧表の「感想の要点」の①のHD・MS・IZの三人を起立して発表させる。(三人を起立させたまま質問している。)

・表現技法について、どういう思いで使っているか。
 作者の意図、ねらいを考えるよう方向付け、発表を評価しながら授業を展開。

11. 「作品」・「わたし」について、感想Aとして、次の要点で起立させ発表させる。

- ① 自己中心的——三名
- ② 「逃げ」——一名
- ③ 孤独——一名
- ④ 怒り——三名

12. 「作品」・「わたし」について、感想Bとして、次の要点で発表させる。

- ① 束縛されたくない反発心——八名
- ② 自己主張——六名
- ③ 自由に生きたいという思い——九名
- ④ わがままとは違う自己主張——一名
- ⑤ 無限の可能性を主張——九名
- ⑥ 「わたし」のパワー——七名

・11・12ともに起立後、表現のどこから感想を得たかを質問し、感想の拠り所を明らかにしつつ内容理解

「わたしを束ねないで」感想一覧表

感想の要点		書いた人・()は再出	コメント欄
表現内容・方法	①想像力がすごい。 ②対句が使われている。 ③自然のすごさ・重要性を感じた。 ④「わたし」は気が強く、自己中心的だと思ふ。 ⑤「わたし」は家事・手伝いに疲れを感じ、逃げたいと思っているのではないか。 ⑥悲しみや孤独を感じ、暗い詩に思えた。 ⑦何かに怒っている感じがする。	HD・MS・IZ YS RE・SN MT・MK・DI KN RI MS・TM・AK	
「詩」や「わたし」についての感想A			

13. 本時のまとめ
 ・感想A・Bに分けて、確認してきた。発表を通してAと考えていた者もBにも一理あると考えたかもしれない。逆にBと考えた者もAも考えられると思つたものもいるだろう。それもよい。詩は、一緒に考えていくもの、さらに考えを深めていってもらいたい、とまとめる。

14. 次時は、14からと予告。

疑問	<p>⑮ここでいう「わたし」はいったい誰のことだろうか？</p>	(MR)	
	⑯私も「わたし」のように生きたい。	(AK)・(AK)・(TM)・(AK)	
	⑰勇気や希望が湧いてきた。	(TH)・(MS)・(AK)	
	⑱作者の思いに共感し、この詩を好きになった。	(AY)・(KM)・(NE)	
	⑲四連に共感・好感を覚えた。	KI・TH・KK・KM・AY・NE	
	⑳「わたし」のパワーを感じた。	(TH)・(AY)・(NO)	
	㉑無限の可能性を主張。	TK・SN・MS・TK	
	㉒わがままとは違う自己主張。	MI・(MS)(MK)・(MR)	
	㉓自由に生きたいという思いが伝わる。	NE	
	㉔「わたし」は皆と一緒ではない。「わたし」は「わたし」であるという自己主張。	(MS)・(MY)	
	㉕杵や方にはめられたくない、束縛されたくないという反発心を感じる。	AR・MS・MR・(KM)・(DI)・(MY)・(SZ)・(MK)・(MS)	
	㉖「詩」や「わたし」についての感想B	AK・MK・MY・KK	
		KM・AY・(MT)・(YS)	
		TM・NO・MR・AK	

(注 授業では波線部まで、一覧表を用いて生徒に発表させた。)

次に授業に関する記録の一部を掲げる。感想一覧表の「⑪わがままとは違う自己主張」の発表から、「⑫無限の可能性を主張」の発表までの記録である。

松本 ⑪番。わがままとは違う自己主張。ほんとはここ（⑩―渡辺注）に含めようかと思っただけで、いいこと
 といっているなあ。ひとりだけど頑張ってください。起立してください。なぜ、単なる自己主張ではなく、
 わがままとは違うという言葉をつけたんですか。

NE わがままっていうのは、あれもいやだあれもいやだというだけだけど、ここでは自分はそれは嫌だけどこ
 うなりたい、①私はこうですよとちゃんといつていることがあるので、自己中心的、わがままではなく自己
 主張だと思いました。

松本 ふーん、わがままではない自己主張、ただなにかもこれがいや、これもいやだ、あれもいやだという
 だけではなく、②こうなりたいたんだよほんとうはというものをもっているから、わがままではなく自己主張
 なんだと。③するとさつき考えていた四連のものも、なんとなく、お母さんが言っていたのは、単なる逃げ
 でもわがままでもないなと見えてくるね。はい、ありがとうございます。皆さん拍手しましょう。

次行きましょう。次は、⑫番、無限の可能性を持つ、新しい言葉が出てきましたね。感想者は起立してく
 ださい。可能性という言葉が出てきた。どの辺りから可能性というものをイメージしたのですか。はい、
 KU君。

KU 各連の一番最後の方に、一連目は、「見渡す限り」というすごい広いイメージがあって、二連目、「つば
 さの音」、「目には見えない」けれど、「つばさの音」が聞こえるから広さを感じ、「ふちのない水」、三
 連目は。四連目は「風」。五連目は、「はてしなく流れていく」というところから、くぎられずに、すごい
 無限の感じがあるなと思いました。

松本 それを可能性ととらえたんだね。ほう、おもしろいですね。じゃ、席について下さい。同じポイントを見
 ても、とらえ方が様々になってきたね。

ここで松本美樹さんは、傍線部①のNEの「自己主張」だという意見を、まず、傍線部②のように受け止めた。その後、傍線部③のように、先に発表のあった、感想一覧表の「⑤『わたし』は家事・手伝いに疲れを感じ、逃げたいと思っっているのではないか。」に関連させ、それに対して「お母さんが言っていたのは、単なる逃げでもわがままでもないなど見えてくるね。」と読みを方向づけている。

この「感想B」に分類された感想の発表は、すでに発表を終えた「感想A」に対し、揺さぶりをかけ、気づかせ、読みを「感想B」の方向に向け、さらに「B」の後の感想に繋いで読みを深めようとするものである。松本美樹さんはこれができるだけ発表の中で自然に気づかせるように心掛けている。

なお、感想発表は、グループ全員を起立させた後、一名が行い、他は違った意見があるかどうかを尋ねられるに止まっていた。ここには、授業時間への配慮があったものと思われる。これは、浮橋康彦氏の提唱した「全員発言の授業」とは異なり、松本美樹さんが「アレンジした」ものとなっているといえよう。

四 模擬授業の検討——模擬授業のビデオ視聴の感想を中心に——

二〇〇五年五月一七日、四年あまりを経て、「国語科教育法演習Ⅱ」の二時間続きの授業の後半に、松本美樹さんの模擬授業のビデオを四年次生に視聴させ、視聴後、感想を書いてもらった。残念ながら、ビデオは、授業者の松本美樹さんの音声は明瞭に録音していたが、生徒役の学生の発言は十分には拾えていなかった。一人の学生は、「ビデオの音声で、しかもとても音質が悪く聞き取るのが困難なものだったので注意散漫というか、集中できなかった」と述べている（IK）。その意味では、ビデオテープは、「全員発言の授業」の発言部分の録音が不十分という、本授業のねらいの中心を欠いたものであったともいえる。四年次生は、そのビデオを視聴して、次のように感想を述べている。

(1) 今回初めて「全員発言」の授業を見て、とても参考になった。私自身このような授業を受けたことがない

ので、現場に立った際は一度行ってみたいと思う。全員発言の授業は、実施者が指導案でも述べているように、同じ考えの仲間がいるという安心感がある、話す・聞くの基本訓練ができる、他者の発言によって自分の認識を広げることができるなどの利点がある。また、主体的に活動しやすいと思う。

しかし、感想をもとに全員に発表させるこの方法は、単調な授業になる恐れがあると思った。よって、教師はただ「どこの表現からそう思ったのか」と聞いていくだけでなく、今回の実施者のように、教師が考えてほしい問題や、生徒の意見などを全体に問いかけ、授業にめりはりをつける必要がある。

授業の実際については、感想についてどこから読めたかを丁寧に聞いているところが良かった。そうすることで、生徒自身の意見に根拠が生まれ、思考が深まると考える。また、一つの意見を全体にかえすことで、クラス全体の認識の深まりを促進させたと思う。さらに、対比や、自然についての表現が多いなどの意見に対して、「ねらいは？意図は？」と聞き、表現内容・方法について作者の狙いを考えさせていたところがよかった。(S C)

(2) 今回「全員発言の授業」の方法を取り入れた模擬授業のビデオを見たが、全体的に落ち着いていて、板書も速く、様々なところで生徒に対する配慮もあり、見習うべき点が多々あった。

導入部では前時の復習を行い、本時の内容の説明を行っていた。復習はうまくまとめしており、本時の授業の流れを例を出して説明するというのは、生徒にとっても何をすれば良いか明確になり良い。また、前回の生徒が書いた感想を活かし授業を組み立てるという方法は、生徒の実態に即して授業が展開できると思われ、良い方法だと感じた。

展開の部分では、生徒の意見を中心に授業が展開されていた。表現技法においても、教師がすぐに表現技法を聞くのではなく、生徒の感想から引き出し全体に気づかせていた。また、表現技法を確認するだけではなく、その表現技法にはどのような思いが込められているかと質問を投げかけ、作者の意図・ねらいについても考えさせようとしている点が素晴らしいと感じた。

生徒の感想を分類し並べてプリントを作成し、順番に発言させていた。分類や並べ方も読みが深まっただけに工夫していたと考えられる。また、発言させる際には、悲しみという意見が出たら、作品のどの部分からそう感じたかを確認していた。これは作品から離れないためにも重要なやり取りである。

展開の部分は流れがほぼ同じで、後半は飽きるのではないかとという心配もある。プリントのコメント欄の記入に関して、記入の時間はなく、聞きながら発表しながら記入するのは難しいのではないかと問題点もある。しかし、このように生徒全員の意見を取り入れ、授業を組み立てていくというのは、生徒のやる気も出し、良い方法だと感じた。(IS)

(3) 全員参加型の授業というものを初めて見て、すごく感心した。今までにこのような授業を受けてきたことはあるけれども、どのように進めていけばよいのかなども分からなかった。とても参考になった。しかし、この全員参加型の授業は、教師にそれなりの力量が必要であると思った。いや、どの授業においてもそれは確実に必要なのだが、この授業においては生徒の意見に対する教師の切り返しの力がこの授業の鍵ではないかと感じた。生徒の意見のどの部分に注目して、切り返すべきなのか。この教材で学んで欲しいことと生徒から出た意見を、どのように自分の持っていく方向に向かわせるか。その教師の力量が問題になってくるのではないだろうか。

けれども、生徒に感想を書かせてそれに基づいて授業を進めていくのはとても良いと思われる。その感想を学習プリントにまとめて、次時で「どうしてそのような感想を持ったのか。」ということを考えさせることで、生徒は改めて自分の持った感想について考え、その感想に論理性を持つことができるからである。また、そのような授業にすることで教師側も「生徒の意見のちよつとした違い」を発見する力が身につくのではないだろうか。この授業は、今まで見たことがなかった分、新鮮で参考になった。しかし、教師の切り返しの仕方が一定されず、パターン化して新鮮味がなくなり、飽きてしまう生徒も出てくるかもしれない。そこを飽きさせないようにするには、どのような工夫が必要になってくるかを私たちは考える必要があると感じた。(KA)

(4) ビデオを見て、導入から声も明るくて届きやすくしつかりしている印象を受けました。また、生徒の感想の中から表現技法を理解させていく方法は抵抗感なく学び、理解することができて有効的だと感じました。初発の感想を大事にしている、授業でも取り組んでいる努力が見えて、詩の教材の指導方法への工夫を感じました。しかし、その初発の感想を基になぜそう思ったのかを同じ様な感想に分け、その生徒数名に起立させ発表するという方法と取っていたのですが、積極的な生徒のみが発表するという形になっていたように見受けられたので、全員を起立させた意図がなかなか見えませんでした。発表できなかった生徒への配慮として「みんなも同じかな？」という風に言っていたのですが、教師側から「○○さんはどう思ったかな」などということばがあってもよかったです。また、発問で「自信をもっている人？」というのがあったので気になりました。全体的には、授業もスムーズに流れていて良かったと思います。板書もきれいな字でスラスラ書いていたので感心しました。また、対句と対比の誤りをさりげなく正していたので、臨機応変に対応していたと思います。過去の先輩方の模擬授業のビデオを見ることができて、今自分に足りないものが具体化してきました。実習を控え今回の授業も参考に教材研究を進めていきたいです。(SC)

(5) 良いと思ったところは、まず、板書が速くてとても良いと思った。また、作品のメッセージを生徒の感想から読み深めていくという授業内容がとても良いと感じた。自分の感想が実際に授業に使われるというのは単純に嬉しいと思う。次に、これから行う発表の仕方を先生自らが簡単にわかりやすくしかも短時間で説明しているところもとても良かった。また、詩に使われている表現技法に着目してその技法を使った作者の意図を考えさせるのも良かった。

気になったのは、板書を写す時間があまり取られていなかったもので発表している生徒の意見に聞き手側の生徒が耳を傾けることができていなかったように見える。これでは、「全員発言の授業」は達成しにくい。また、授業はスムーズに進んでいるが、その分、教師に「○○さんも○○さんと同じような意見ですか」と言われたら「同じです」としか言えないと感じた。「○○さんとは少し意見が違います」というような生徒の意見を聞き出

せない雰囲気があった。また、感想A感想Bの違いがあまりわからないと思ったので、それぞれを簡単な言葉に置き換えると良いと感じた。

この授業には教師の無駄な動きがなかった。発問が生徒に通じなかった時に、戸惑ったりせず、「では質問を変えます」と言って対応していたり、基本的なことが身に付いてる授業だった。(U A)

(注 傍線・波線は渡辺が付した。傍線部は肯定的評価が記された箇所であり、波線部は疑問、課題が記された箇所である。)

「全員発言の授業」の方法については、次のような感想が見える。

感想を活かし授業を組み立て、生徒の実態に即して授業が展開できる。分類や並べ方も読みが深まっていくように工夫していた。作品のメッセージを生徒の感想から読み深めていくという授業で、他者の発言によって自分の認識を広げることができる。また、主体的に活動しやすいと思う。生徒は改めて自分の持った感想について考え、その感想に論理性を持つことができる。さらに、同じ考えの仲間がいるという安心感があり、話す・聞くの基本訓練ができる。

一方で、次の問題を指摘する者もいる。感想をもとに全員に発表させるこの方法は、単調な授業になり、パターン化して新鮮味がなくなり、生徒が飽きる恐れがあると思ったものである。

授業の展開については、次のような記述が見られた。

全体的に落ち着いていて、板書も速く、きれいな字でスラスラ書いていた。導入から声も明るくて届きやすくしっかりしている。様々なところで生徒に対し配慮していた。これから行う発表の仕方を先生自らが簡単にわかりやすく、しかも短時間で説明しているところも良かった。また、発言させる際には、作品のどの部分からそう感じたかを確認していた。これは作品から離れないためにも重要なやり取りである。さらに、授業の中で、対句と対比の誤りをさりげなく正したり、適切さを欠いた発問はすぐに発問を変えたりと、臨機応変に対応できていた。

しかし、次のような疑問点、問題点、改善点の指摘も見いだされている。プリントのコメント欄の記入に関しても、記入の時間はなく、発表し、一方で聞きながら記入するのは難しい。また、積極的な生徒のみが発表するという形に

なり、全員を起立させた意図が分かりにくい。グループ内で異なる意見を言いにくい雰囲気になっていた。さらに、発問に対する答えの求め方にも不適切なものが見られた。

ビデオを視聴した学生は、「全員発言の授業」のねらいと方法を理解し、その有効性を評価しながらも、その問題を鋭く看取している。授業展開についても、発問・応答・指示・配慮・態度、発声、板書、即決性（臨機応変）と言った点から、評価、批判している。学生の感想からは、新たな方法に学びつつ、問題をも見いだし、鋭く評価、批判することによって、学びを深めている様子が窺える。

おわりに―考察のまとめ

「教職課程運営に関する研究交流集会」で実施された、文学部国文学科三年次生、松本美樹さんによる模擬授業について、実施計画、模擬授業の実際、模擬授業の検討という観点から紹介と考察を行った。

模擬授業の中心的方法は、浮橋康彦氏になる「全員発言の授業」をアレンジしたものであった。「教材観」には、やや過剰な期待が見いだされるが、教材をとおして理解、認識を深めるべきことと、国語学力の育成とを視野に入れてまとめている。「指導目標」は、「読む力」・「聞く力」・「話す力」に加えて、「考える力」を入れているところに特色が見いだされる。本教材について理解、認識させるべき価値目標を別途設定するとよかったが、それは本計画案の「考える力」の中に記述が見られる。「指導計画」には、詩の鑑賞指導から創作指導への展開が具体的に計画されているが、この計画は、取り分け、詩の創作（課題）と発表（四時間目）の計画に問題がある。詩の創作に関する指導がなされないままに詩作が課題とされ、次時（四時間目）にすぐさま発表となっている。一時間で一クラス六班全員に発表させる点、感想を書かせ、学習のまとめをすることになっている点にも疑問が残る。

授業は、先述した問題点を含むものであったが、落ち着いた態度で、明瞭に発問、指示、応答を行い、たえず教材本文に感想の根拠を求める発表を行わせることによって理解、認識を深めるよう配慮されていた。最初の詩の表現・方法に関する感想発表は、その表現意図を考えさせようとするものであった。また、授業の中心であった「感想A」

「感想B」の発表は、「感想A」に対し、揺さぶりをかけ、気づかせ、自然に読みを「感想B」の方向に向けようとする意図が見いだされた。

ビデオを視聴した学生は、「全員発言の授業」のねらいと方法を理解し、その有効性を評価しながらも、その問題を鋭く看取している。授業展開における、発問・応答・指示・配慮、態度、発声、板書、即決性（臨機応変）についても、評価、批判している。学生が、模擬授業によって、新たな方法に学びつつ、問題をも見だし、鋭く評価、批判することをおして、学びを深めていったことが推察される。

注 二〇〇〇年度からの新課程では、国語科教育法Ⅰ（二年次後期 二単位）、国語科教育法Ⅱ（三年次前期 二単位）、国語科教育法演習Ⅰ（三年次後期 二単位）、国語科教育法演習Ⅱ（四年次前期 二単位）の計八単位になっている。